

夫立ち会い分娩の検討

研究第一部
共同研究者

堀口 貞夫・千賀 悠子
森 恵美・大島 百合子 (愛育病院)

I はじめに

最近20年程の妊産婦管理の質的な進歩は目覚ましい。それに伴って、妊産婦死亡率や周産期死亡率の減少が達成されたわけであるが、その進歩の大部分は、メディカル、エレクトロニクスの進歩によるところが大きい。と同時に、あるいは、その進歩の基礎には、妊娠・分娩に対する母子医療機関者の考え方の変化、それを触発した社会環境の変化があったことを見逃すことはできない。

一夫婦の子供の数の減少傾向は、胎児に対する「大切さ」の感じを大きく変えた。また、核家族化によって、妊娠・出産についてのしきたり・慣習から受ける影響が少なくなってきたと思われる。昔の家長制度の中の夫と妻の関係と、現代の夫と妻を中心とした家庭のそれとは違って当然である。このような背景のもとで、出産が妻だけの役割ではなく、夫と妻の共同作業であるという認識が育ってきたと考えられる。

周産期医療の質的な進歩によって、分娩の安全性が母子共に著しく向上したことで、分娩の場に医療関係者以外の人が存在しても、私たち医師・助産婦にとって心理的負担になることはなくなり、分娩の安全性のみを目標とした妊産婦管理から、一步踏み出すことが可能となった。

分娩場所の推移からみると、昭和35年から40年にかけて、施設分娩数が50%を超え、さらに45年には90%を超えるようになり、分娩が病院あるいは診療所などで、医療関係者に囲まれて行なわれるようになった。しかし、施設分娩の高度な安全性と引き替えに、出産の場から家族とくに夫を疎外することになったと思われる。

しかし、このような状況は、産婦自身にとっては不本意なことで、医療者任せの何が起っているかわからないままの出産ではなく、確かな手答えの中で子供を産みたいという希望をもつ人も多くなってきた。こうした出産に対する考え方の変化の中で、「子供がこの世に誕生

する時を夫婦一緒に迎えたい。」という考えも生れてきた。

当院では、このような夫婦のニーズに応じて、夫立ち会い分娩を受け入れ、3年目を迎えた。私たちは、現在の夫立ち会い分娩の意義・問題点などを確認し、夫婦にとって満足なお産へと援助する手掛りを得ることを目的として、アンケート調査を行った。

II 対象および方法

1982年1月1日より、1983年4月30日の間、当院で「夫立ち会い分娩」を経験した夫婦135組(24週以降分娩数1201例中……11.2%)を調査対象とした。アンケートは、出産後2ヶ月前後に、夫婦各々に郵送した。なお、今回は、夫に対するアンケート(別表)について検討した。

III 結果

アンケート回収数は、93組(68.9%)であった。分娩に立ち会った後の感想・考えを自由に記載してもらった結果を、表1のように分類し、A、B、C、D群をした。

- * 対象……1982.1.1～1983.4.30の間
「夫立ち会い分娩」を経験した夫婦135組
(24週以降分娩数 1201例中……11.2%)
- * 回答率……93例(68.9%)

表1 「夫立ち会い分娩」の感想・考え

	例数	%
A群 - 肯定	65例	69.9
B群 -	12	12.9
C群 -	2	2.2
D群 - 否定	6	6.5
N.A.	8	8.6

A群は、夫立ち会い分娩に意義を感じ、満足した群である。例えば、「生命の誕生に感動した」「女性の偉大さを感じた」「自分の子供と実感できた」などと肯定的な意見をもっている人たちである。

B群は、対象者の夫たちが夫立ち会い分娩に意義を感じたかどうか判断しがたい群である。

C群は、夫立ち会い分娩に意義を感じたが、十分に満足できなかった群である。

D群は、「役に立たなかった」あるいは「夫は立ち会わない方が良い」というように、夫立ち会い分娩に意義を感じておらず、夫立ち会い分娩に関して、否定的な意見を述べた群である。

そこで、私たちは、なぜ、夫立ち会い分娩に満足しなかったのかを探るために、肯定群のA群と否定群のD群について、次のように比較検討した。

① 夫立ち会い分娩に対する夫の主体性をみるために、「夫立ち会い分娩を最初に希望したのはどなたでしたか」という設問をした。その結果(表2) A群では、夫あるいは夫婦でというように、夫に主体性のあったものが35%あったが、D群では皆無であった。

② 「どのような考えで、分娩に立ち会うことに決めましたか」という問いに対して、「妻の役に立ちたい」「分娩は夫婦の共同作業である」あるいは「子供の誕生をこの目でみたい」と主体的な考えが述べられていたものがA群で95%、D群ではそれよりも低率で33%であった。

③ 「夫の妊娠・分娩等に関する学習」について見たところ、表4のごとく、A群、D群とも70%前後の夫が本を読んだとかラマーズ法の学習などをしていた。

表2 *「夫立ち会い分娩」を最初に希望したのは、どなたでしたか?

	A 群		D 群	
夫婦で	13例	20.0%	-	-
夫が	10	15.4	-	-
妻が	42	64.6	6	100.0

表3 *妊娠・分娩などに関する知識をえましたか?

	A 群	D 群	全例
した	46例 70.8%	4 66.7%	65 69.9%
時間がなかった	6	1	11
必要がなかった	3	0	3
しなかった	10	1	14

表4 *どのようなことをしましたか?

	A 群	D 群	全例
ラマーズ法の講習	4例	0	5 41.5%
“, 父親学級	1	0	1
ラマーズ法を自習	19 41.3%	1 25.0%	20
“, 父親学級	1	0	1
“, 本を読む	2	0	2
父親学級	6	1	7
その他	12 26.1	2 50.0	14 32.3
N. A.	1	0	1

④ 「分娩時の援助」についてみると(表5)、ラマーズ法に従ったり、腰の圧迫をしたりした夫は、A群82%、D群67%、全体では79%であった。多くの夫が、何らかの形で分娩時の援助を行っていた。しかし、「何をしてもよいかわからなかった」夫が、A群では9%に対して、D群では17%と高率であった。

⑤ 前述の援助の効果は、表6のとおりである。「あまり効果がなかった」と答えた夫は、A群では11%、D群では高率で50%であった。

⑥ 「夫立ち会い分娩を経験して、もっと知っておきたかったと思うことがありましたか。」という設問に対して、知っておきたかったことがあったと答えた率は、A群で63%、D群では低率で33%であった。(表7)

「知っておきたかったことの内容」について両群間を検討することは、D群が少数例なので不可能であったが対象全体では、「分娩の経過が知りたかった」47%、「妊娠中・産後の女性の心理について」40%、「呼吸法」が30%であった。(表8)

⑦ 次の分娩時の立ち合いの希望をみたところ(表9)「是非立ち会いたい」と答えた人は、A群では88%だったが、D群では皆無であった。D群の「次回は立ち合い

表5 *陣痛室や分娩室で、奥様にどのようなことをしてあげましたか?

	A 群	D 群	全例
ラマーズ法や腰の圧迫など	53例 81.8%	4 66.7%	73 78.5%
その他 { マッサージ 食事の介助 はげましの言葉	6	1	9
何をしてもよいか わからなかった	6 9.2	1 16.7	9 9.7

堀口他：夫立ち会い分娩の検討

表6 *ラマーズ法や腰の圧迫をなさって
効果がありましたか？

	A 群	D 群	全例
効果があったと思う	42 79.2%	2 50.0%	54 74.0%
あまり効果がなかった	6 11.3	2 50.0	12 16.4
麻酔が使えたら	0	0	1
わからない	2	0	2
麻酔を使用	0	0	1
N. A.	3	0	3

表7 *「夫立ち会い分娩」を経験して、もっと知って
おきたかったと思うことがありましたか？

	A 群	D 群	全例
ある	41例 63.1%	2 33.3%	53 57.0%
ない	23 35.5	4 66.7	35 37.6
N. A.	1	0	5

表8 *どのようなことを知っておきたかったですか？

	A 群	D 群	全例
分娩の経過	20例	0	25 47.2%
妊娠中・産後の女性の心理	13	1	21 39.6
呼吸法	13	0	16 30.2
妊娠の生理・異常	7	0	9 17.0
新生児の異常	7	1	9 17.0

重複回答あり

表9 *奥様の次の分娩の時も「立合いたい」と
思いますか？

	A 群	D 群	全例
是非、立合いたい	57例 87.5%	0	68 73.1%
あまり立合いたくない	1 1.5	3 50.0%	10 10.8
絶対に立合いたくない	0	1 16.7	3 3.2
出産の予定なし	4	1	5
N. A.	3	1	7

たくない」という4例の理由として、「分娩は医療にまかせるべきだ」とか、「男にできることはない」、あるいは、「何もしてあげられないから」、そして、「疲れるだけだから」ということがあげられている。

III. 考 察

1. 夫立ち会い分娩の意義

今回は報告していないが、夫立ち会い分娩に対する妻の意見も調査しており、96%の妻が、分娩に立ち会ってもらう人として、夫を選んでいる。したがって、産婦にとって、夫が最も心強いパートナーであろう。産婦の傍らに夫が付き添っていることで、産婦の不安・緊張・心細さが和らぐのではないかと考えられる。精神的な安定は、身体的緊張を緩和するのに役立ち、産婦の疲労を軽くすることになり、分娩の進行にも有利に働くのである。夫の役割は、精神的には、妻を支え、勇気づけ、激励し、お産の進行状態を妻に伝えることである。身体的には、腹部のマッサージ、腰の圧迫、呼吸調整法のリズムとり、筋弛緩の状態のチェック等である。ここで得られる共有体験は、その後の夫と妻の関係に何らかの影響を与えるものとする。また、自分達の子供の出産の場に居合わせ、重要な役割を果たしたということは、親子の一体感を強く感じるごにもなるのではないだろうかと思われる。

2. 夫立ち会い分娩の問題点

①産婦と家族の出産に対する不安の相乗作用
従来も、家族とくに実母が陣痛室に付き添うことがあった。この場合は、産婦の苦痛の訴えが多い時や分娩が長びく時に、家族の心配・不安が高じ、それが産婦の不安を助長し、悪循環ということになり、しいては、医療者側に分娩方法の変更を要求してくることもあった。これは、予備知識もなく、また、分娩に立ち会う目的も不明確なままに、立ち会っているからである。しかし、現在の夫立ち会い分娩の場合は、立ち会うこと理由や意義を明確にしており、夫は実母より比較的冷静に行動できること、事前の面接等により、医療担当者側に対して信頼感をもっていることなどにより、従来のような実母による付き添いとは根本的に異なるものがあると思われる。

②細菌感染危険の増加

室内の落下細菌の数を調査すると、部屋への出入りの人数に比例して、菌数が増加する。従って、関係のない人間が清潔区域とされる分娩室に入らない方が良いことは確かである。しかし、夫が妻の分娩に関係のない人間

かどうかの認識の差であると思われる。

ただ、無菌、清潔についての意識は、医療関係者とは差があるので、この点について、事前に指導が必要と考えられる。

③医師・助産婦の仕事の妨げになる

分娩室での医師や助産婦は極度の緊張を強いられている。第三者の存在は気を散らすこととなり、夫の目を意識して、あるいは、産婦へと同時に、夫へも気をつかわなければならないことは、ぎりぎりの局面での判断に何らかの影響を与えることも考えられる。

しかし、胎児死の場合、その場にいる夫には、状況がよく理解でき、産科手術が必要となった時も、その必要性は理解しやすいようである。そして、また、医師や助産婦の真剣な取りくみは、立ち会う人に感銘を与えるようである。

④大出血・重症仮死・奇形児出産などの異常の場合どうするか

第三者の存在の有無にかかわらず、医療担当者には常に冷静な対応が要求されるのであって、これが分娩の立ち会いを避ける理由にはならない。奇形児に対しては、その場で異常を視認しながら説明できるので、後で説明するよりも、理解を得やすいように思われる。しかし、大出血・重症仮死など難かしい処置を強いられる場面に相対した時の対応については、明確な解答、あるいは、解決策は、私たちもまだ持つにいたっていない。

⑤「夫は分娩に立ち会わないほうがよい」という意見について

この調査で、夫立ち会い分娩に関して否定的な意見を述べたD群と、肯定的な意見を述べたA群とを比較検討した結果、D群の夫の特徴が明確となった。

D群の夫が、夫立ち会い分娩に満足できなかった原因として、次の二つのことが考えられる。

第一の原因は、D群の夫は、A群の夫に比べ、夫立ち会い分娩に関して消極的で、その目的が明確にならないままに、分娩に立ち会ってしまったということである。このような夫の場合、妻の傍らに付き添っていることが、妻に精神的な安定をもたらす、お産にもプラスに働くということを理解できなかったために、夫が立ち会う意義が感じられなかったと考えられる。

また、お産は医療者に任せろべきだという考えが強いために、夫立ち会い分娩の意義が見い出せず、夫婦二人

のお産というかわり方ができなかった例もある。

第二の原因として、分娩時、妻に何をしておいたらよいかわからなかったり、夫の努力にもかかわらず、自分の力では妻の産痛を和らげることができなと感じたりしながら、長時間妻につきそっていたために、無力感が増したことが考えられる。心身ともに疲れてしまい、妻の役に立てなかったという感じが、出産の喜びより、強く残ってしまった例と考えられる。

しかし、以上の原因などから、夫立ち会い分娩に意義を感じられなかったD群ではあるが、その妻6人中5人は、「夫が立ち会って良かった」と評価していることに注目したい。

以上より、今後の指導において、次の二点を考慮することが望ましいと考えられる。

現在、当院では、夫立ち会い分娩の申し出があった場合、医師が夫婦と事前に面接しているが、今後は、申し出のあった時点で、夫立ち会いの動機や目的等を伺うアンケートを行い、目的が明確か、主体性があるかどうかなどを把握し、面談時の指導にいかす。

例えば、立ち会い分娩に消極的な夫と感じられる場合には、妻のそばにいて、夫としての役割が遂行できることを強調し、その妻には、夫立ち会い分娩に関する話し合いを夫婦間でもたれるように、そして、その目的を夫婦の中で明確にするように助言する。

第二点としては、夫が立ち会って、無力感を味わうことのないように、分娩時の効果的な援助方法を具体的に指導することである。夫に対しては、母親学級への参加を促す。夫婦が私達の援助を必要とする時には、いつでも呼応できるような体制を整備する。

最後に、自分の力では妻の産痛を思っていた程和らげることができなかったために、無力感を強く感じ、精神的役割をも否定し、そばにいてに耐えられなくなって、しかも、そこから逃げ出すわけにはいかない心理状態に追いこまれた夫がいることに、どう対処したらよいかということが、今後の課題であると考えられる。つまり、分娩前・分娩時の適切な指導だけでは、そのすべてが、解決できるとは思われないうことである。日頃の夫婦の状態にかかわることであり、夫立ち会い分娩の意義を強調して、どの夫婦にも一律に押しつけるようなことは避けなければならないと思われる。